

# メディアのなかのカーตูน

## ——政治漫画研究再考——

東京情報大学 茨木正治

### 1 目的

この報告の目的は、政治風刺を主目的とした1コママンガ（カーตูน、「政治漫画」）の研究史を概観する際に、画像情報であるカーตูนと文字情報、さらに掲載媒体である新聞・雑誌との関係に着目して、研究傾向について再構成して、カーตูนの内容理解に関する「文脈」とはいかなるものかを明らかにすることである。また、研究の再構成を行う際に、マス・メディア（効果）研究を手がかりに、その背景となる社会学的諸理論や、隣接諸学問である政治象徴研究にも敷衍して、象徴や記号としての「政治漫画」がもつ諸特徴を顕在化させることも付随する目的となる。さらに、Webメディアの登場が「政治漫画」にとってもつ意味について、を射程に入れたうえで、政治風刺としての「政治漫画」を考える。

### 2 方法

分析対象をまず、(1)新聞・雑誌掲載の「政治漫画」を素材にしたマス・コミュニケーションないしメディア研究の領域の諸研究とした。対象時期を①1980年代まで、②1990年代、③2000年以降の3期に分け、それぞれについて、その傾向を概観したのち、代表的研究をあげて考察した。その際、①「政治漫画」内の文字情報、②「政治漫画」外の文字情報（記事、論説、投稿など）、③社会・文化的事象に分けて、それぞれと「政治漫画」がどのように関連するかに焦点を当てて検討した。次に(2)「政治漫画」を説明する理論的背景となる諸理論のうち、メディア効果論、社会学諸理論、政治象徴研究の3つの領域に限定して、上記1の研究例を考察した。

### 3 結果

分析の結果、3期を通じて「政治漫画」を説得の視点から考察する研究の傾向は見られた。80年代までの一方的な送り手の以降の反映という考察からは脱却し、読み手としての受け手からの欲求、意図を考慮した相互作用的な考察が90年代以降散見された。2000年代に入ると、「政治漫画」そのものへの関心が希薄になり、ネットとの関係を見出すことは難しくなった。

しかしながら、2000年代の研究において、相互作用・隣接諸学問への関心から、コミュニケーションモデル（Lasswell）の全ての要素への関心が「政治漫画」研究においてなされつつあるものも僅かながらみることができた。たとえば、PS（Political Science）2006年号では、女性の「政治漫画」家を取り上げて、ジェンダーの視点を踏まえて、活動状況、理念、方向性について語っている。

ところで、画像の読み取りに際しては、「文脈」をどう把握するかという点についても、上記の「説得」研究の視点が当該研究に影響を与えていた。たとえば、レトリックを用いて「政治漫画」を読み取ろうとするMedhurstらの研究（1981）では、テーマ設定、表現形式、読み手の記憶喚起、所作において、それぞれ「画像内情報」「画像外情報」、「社会文化環境」のレベルが混在していることが明らかになった。

### 4 結論

以上から、「政治漫画」研究では、「文脈」への意識が個別具体的な作品に関してのみ行われ、一般化への志向は道半ばである。背景理論も、その個別作品を読み解くための手段としている。「絵解き」でも「メッセージ」でもない、解説と評論の二分法では収まりきれない大多数の「政治漫画」をどう読み解くか、Webメディアの席卷が従来のメディアの「省察」を促している現在、「政治漫画」にもその必要性は求められるはずであろう。

### 文献

Medhurst, M., & M., A., Desousa, (1981), "Political Cartoons as rhetorical form: A taxonomy of graphic discourse," *Communication Monographs*, 48, 197-236.